

ドーコレータクビ

『叟番三式壽』
評合

出 演 者

翁 アド 竹本 相生 太夫
千歳 竹本 大隅 太夫

三番叟 ヴレ 豊竹 古鞆 太夫
三味線 豊竹つばめ 太夫

囃子 鶴鶴澤澤道八
梅屋 澤澤清吉 清五郎
金太郎社 團伊三郎中

太宰 施門

鴻池 幸武

森 ほのほ

堀川 豊弘

時 八月二十三日

場所 土佐堀船町京家

記者 先頃ピクターから義太夫レコード「壽式三番叟」が發

賣されました。レコードの持つ普及性と保存性との爲め、

この際厳正な批判を下しておく必要があると存じます。今

日は丁度よい機會でありますから、レコードをお聴き願つ

て充分御検討願ひます。先づその企劃からお願ひします。

堀川 レコード會社の昨今は全く種がつきてゐるやうです。

外國音樂は勿論種がなくなつてゐますし、流行歌は遠慮せ

ねばならない、と云つて軍歌ばかりを作つても居られませ

ん。そこで結局古典ものをと云ふことになるのでせう。

森 政府の望む明朗明快な、而も建設的な娛樂として、この

「三番叟」が選ばれたわけですかね。

太宰 神靈への感謝といつた意味も含まれてゐませう。

森 時局的な題材と云へるでせう、無難ぢやありませんか。

武智 然し結果として無難ではなかつたことになります。

記者 その意味は追々伺ふことに致しませう。

武智 このレコードが一般の嗜好にあふでせうか。會社のお

金儲けの心配ですが……

森 義太夫好きなら段物の方を希望するかも知れませんね、

然し謡曲の方では「忠靈」がレコードになつてから素人の
方がどんどんやるやうになりましたよ。

武智 「三番叟」も猿之助で、大いに大衆化されてゐます
で、ピクターもそれにたよつたのかも知れませんね。

鴻池 ピクターの狙ひは、羽左、幸四郎、仁左の「勧進帳」

や「忠臣蔵」が素晴らしい好成績をあげたのに味を占めて
のことさせうが……

武智 ところが「三番叟」は凡そ非通俗的と來てゐますから
ね。

太宰 結局、通のみの鑑賞で、普及價値はないでせう。

記者 鴻池さん、古馳太夫等が、このレコードを吹込んだ経
緯をお聞きになつてゐませんか。

鴻池 よくは存じませんが、最初古馳太夫は義太夫の「三番
叟」は三人でやるものであるから、太夫三人、三味線は道
八をシンにして吹込み度い希望だつたさうですが、三人で
は會社の營業方針に叶はないといふので暫く中止になつて
ゐたのが、今春になつて、今度のやうな觸觸れで實現する
ことになつたのです。

武智 義太夫節に於ける狂言といふものは難しいものですか
ら、古馳以外にやれる人はない譯なのですが、ピクターと

しては古馳一門のみでは商品價値がないと云ふのでせう。

鴻池 そうです、偶々古馳、道八その他二三の人の優れた藝
があつたればこそ、これだけのものが出来ましたが、恐らく
ピクターとしてはさういふ藝の問題は念頭になかつたで
とでせう。古馳、道八が居なくとも、この企劃は出来たで
あらうと思はれる節があります。

武智 正にお説の通り。

鴻池 古馳が紋下の位置にあるから、翁を持つて來たので、
津太夫在世中なら津に翁を持つて行つたでせう。

武智 えへへさうですとも。

鴻池 藝のことなどは、この會社には判つてゐないでせう。

この會社ばかりでなく、某會社で鏡太夫の「三番叟」が賣
出されてゐるのも同じく藝の判つてゐない證據です。

記者 その鏡太夫のレコードを持つて來て、比較して聽けば
よかつたのに殘念なことです。

武智 古馳太夫の最初の案の通りを實現してゐれば、立派な
ものが出來、レコード會社として藝術的に最も意義の深い
仕事を爲し遂げたことになるわけだつたのに、結局ピクタ
ーの拜金主義がこの失敗を敢てしたといふことになります
レコード文化協會あたりが、頑張るべきなのですが、えて
お役所などは藝が判らぬもので……。

記者 「三番叟」についてのお話を伺ひたいと存じます。

森 「三番叟」は能としては特殊なもので、能ではない、能

以前のものだといふ人もあります。義太夫の方でも特殊なものではないでせうか。

鴻池 並木正三の「三十石燈始」の大序に劇中劇として三番叟の全文が入つてゐます。

武智 それ以前にこの「三番叟」が行はれたかどうかは證據

がありません。右の「三十石燈始」初演の際は、翁は鎌太夫、千歳が麓太夫でありました。麓風のニヂツタ音がてんで遣へない大隅に千歳が語れる譯がありません。さうく

今度のレコードでは千歳を大隅と相生とが分割して語つてゐます。これはをかしたことですが、こゝらが會社の金儲け主義が變にたゞつて來てゐるところだと思ひます。

鴻池 これは大隅の力のないことを證據立てゝるやうなものです。大隅に力量があれば、相生の役不足を蹴飛ばす苦のところなのですが……

森 能の方では、千歳を二人出すのがあります。レコードのやうに千歳を二人に分割するなら最初のところを連吟にせねばならないわけです。

鴻池 相生は顔は古い太夫ですが、顔ばかり古くても藝の悪いものは三文の値打もありません。このことは大團平も大

隅太夫、組太夫の二人紋下の事件の時に公言してゐることです。

武智 兎に角、景事に昔の遣へない太夫が出てくることが、

間違ひの根本です。先生（森氏）翁と千歳とは兩方ともシテ方から出ることがあります、が、翁は表の拍子、千歳は裏の拍子とでもいふことがあるのでせうか。

森 翁は老松の如く、千歳は若松の如く颶爽たる感じが必要です。

武智 「六平太藝談」にもある通り、千歳が難しいといふのは、位をもたすと翁につき、碎けると三番叟になるといふことなのでせう。

森 御承知の通り、千歳の舞には延年の舞が入つてゐますが元々延年の舞は少年の舞とも云つて、子方が演じてもよろしいものです、稚兒延年とも云ひます。

鴻池 成程、さういふ風に節付がしてありますね。

森 拍子は非常に多い。

武智 「いづれも秘曲の打囃子」のところなどは、その感じがよく出てゐて、本來の節付は全曲中一番氣持のよいところです。それなのに、よほ／＼した感じの相生太夫などが千歳を語つてゐます。

森 それと反対に、三津五郎の千歳はよろしいね。實に颶爽としてゐます。

記者 ではこの邊でレコードをかけて一面々々について皆様の御批評を承りたいと存じます。

(レコードをかける)

記者 私は只今聴くのが初めてであります、實際の演奏を聴く場合と非常に感じが違ふやうに思はれます。

武智 錄音技術の悪いのが、耳さはりです。三味線が小さすぎます。

堀川 恐らくこれは三つ位のマイクを置いて吹込んだのではないでせうか。一つは古軀の前に、一つはツレ、一つは三味線とお囃子の前といつた具合に。そして各々のマイクを絞つて調節するのですが、古軀の前の最も大きく開き、三味線その他の前の最も小さく絞つた調節の仕方に根本的な効果上の誤りがあるのではないでせうか。

記者 では第一面の御批評をお願ひします。

第一面

(古軀)夫豊秋津洲の大日本國常立の尊より天津神七世の後地神の始天照大神

森 第一聲の「夫れ」はあんなものでせうか。「勧進帳」で

は辨慶の「それ」が相當やかましいものになつてゐますがこゝの古軀も苦心を拂つてゐるやうですが、どうも……

鴻池 それはどういふ意味ですか。

武智 曲の位からでせうか、僞せ物の勧進帳を讀むといふ劇的の意味からでせうか。

森 兩方の意味を持つてゐるのでせう。

鴻池 義太夫の「勧進帳」で、読み出す條は「大序」の節付

になつてゐますから「三番叟」のこのところも同じことです。

森 能の方では頭へ力を入れて出ますが、義太夫の方では押

へて出てゐますね、その相違を知りたいと思ひます。

武智 「夫れ」は文章の上では第二面の「岩戸に籠らせ給ひし」にかかるのですから單なる發語で、「勧進帳」の「夫れ」のやうな劇的環境が無いから、曲の位といふことを別とすれば、古軀の出方でよいのだらうと思ひます。「大日本國常立の尊より」の「大日本」の音遣ひがよろしい。

森 武智君は「大日本」の音遣ひを褒められますが、能の方では、このレコードのやうに「ダアイニ」といふ産み字が出るのを嫌ひます。

鴻池 あれは産み字でなく、義太夫の「間」でせう。

武智 こゝをこれだけに語るには餘程、持つ修行が出来てゐぬとやれぬ業です。

森 「天照」から「大神」と移るところが切れてゐるやうに思はれます、どうでせう。三味線の手の爲めかも知れませんが……

鴻池 古軀太夫は常にこうしたところに苦心をしてゐるのですが……

武智 息をつめて持つところがレコードで録音出来ないこと

にも幾分起因しませう。

森 もう一つ「大神」の「ガア、ミ」の二字の間が、離れてゐるやうです。

鴻池 これも義太夫の一間で、莊重なところは一假名々々

に力を入れてやるので、さうなるのでせう。

森 能の方では「オーンガミ」といふ時があります。

武智 古韻もさう語つてゐますが……

森 それにしては「ン」の字が低すぎますね、「オーンガミ」と語つた方が、より莊重に聞えはしまいかと思ふのです。

第二面

(ツレ) 岩戸に籠らせ給ひし時世は常闇と成けらし其時に四方津

神八百萬の御神達神集に集め給ひ燈火をたいて庭神樂(古韻)神

(ツレ)すゞしめと木綿謡

武智 ツレの初めの出が、節を覚えてゐないので捕つてゐません。といふのは、ツレが捕はないのに二つの原因がある

一つは節を完全に覚えてゐないから捕はぬことで、もう一つは言葉を言葉として語らず、假名をひろつて云ふところ

から、言葉として語る人と合はないと云ふ場合で、こゝは

その前者に相當する譯です、後者に相當するところは後の方へ出て來ます。それから一般に各面の最初のツレの出が不捕ひです。

堀川 私は最初、高低二部合唱かと思ひました。

鴻池 古韻太夫だけが、景事が解つてゐてそれを語つてゐるのですが、他の太夫は景事がどんなものかわからず、唯無意味にシンについてオネ／＼いうてゐるに過ぎないのでこんな結果になります。

武智 「四方津神」の條は古韻のみが音をとゞかせてゐます

それで如何にも澤山の神様が集つてゐる情景が語れるので他の太夫はとゞかず修行が出来てゐないので何にもなつてゐません。

森 「四方津神」は古韻一人が語つてゐるやうに聞えました太宰 それでは、その間、他の太夫は何を云つてゐたのでせう。

森 「神集に集め給ひ」は文章上「カンツドヒニツドヒ」が

ほんとうでせう。「カミアツメニアツメ」はをかしいと思ひます。

第三面

(古韻)太祝の神歌や式三番の其謂おさく申も恐れ有とうからり／＼らたらりあがりらゝりとうちりやたらり／＼らたらりあがりららりとう

鴻池 「太祝の神歌」は非常によろしい。古韻と道八とが延ばされるだけのばしてゐます。勿論よい意味でどうが實によい氣持です

森 さうですね。

武智 第一面のところは息と間とで道八が古靴を斬込んでゐます。

道八の間が稍せまく感じられます。

鴻池 至極同感です。

武智 「おさ／＼」に「恐れ有」の持へがあります。如何に

もかけなくもあやにかしこきことを云つてゐるやうな「おさ／＼」です。

太宰 こんなことが表現出来るのは當然のことで、若しこれ

が出来てゐねば、月給は拂へないことになりますが……

鴻池 他にそんなことの出来る太夫が一人もないのに、自然

褒めねばならぬことになるのです。

森 こゝで一寸申添へます。囃子の意氣がのんべんだらりと

してゐて、少しもからはりません。第二面の「四方津神」の

後の笛、第三面の「恐れ有」の後の笛とは兩方とも面白く

ありません。

鴻池 輩のかはりが少しも出来てゐません、速さが變るだけ

で、位がかはりません。

第四回

(續) 所千世迄おはしませ我等も千秋さぶらはん鶴と龜との齋にて

幸心に任せたり(相生)とら／＼たらりたらりらちりやたらり／＼らたらりあがりら／＼とら(大隅)鳴は瀧の水／＼日は照共

だ。へづとうたり常にとうたり君の千歳をへん事は天津乙女の羽衣

よ鳴は瀧の水日は照共たへづとうたりありうとう／＼

武智 この面が一番高價です。といふ意味は反対給付がない

といふことです。お金を泥溝へすてゝゐるやうなもので

中でも「常にどうなり」が一番拙いやうですが……

武智 天津乙女の顛落といつたところで。

森 「ら／＼りとう」といふのは相生太夫ですか、音が抜けて

了つてゐます。「とう」は謡の方では浮くべきところです

従つてそこに力が表現されます。義太夫では節がついてゐ

ない。それをやる太夫にも力がないといふわけでせう。

「ありうとう／＼／＼／＼」と謡は終りになる程、音が上つて強

くなつて來ます。今のを聞くと少しも變化がありません。

鴻池 それは謡ばかりでなく、義太夫の方でもさうです。

堀川 「羽衣、よ」と切れるので、羽衣よーと呼んでゐるや

うです。

太宰 もし／＼亀よですか。

堀川 素人のやうに調子がはづれてゐます。

武智 こゝの清六の三味線が爽かに彈かうと努力してゐるの

が、充分感じられます。翁の位にならぬやう爽かに彈くの

です。

森 「日は照共」から三味線で受けるのですがその間の「間」

をおきすぎるやうに思はれますが如何でせう。

武智 あれは息の込み方が不足してゐるからです。

鴻池、「たへずとうたり」が實に情ないことですね。

堀川 はづれたら、戻さうとはせず、どん／＼はづれて行きます。

第五回

（「ヲレ」とう／＼と鳴鼓宇佐の神の御役にて笛の初音も高麗や笛吹の大明神大鼓は高野の大明神大鼓は熱田の源太夫いづれも秘曲の打囃子鳴は瀧の水日は照神の神勇めされば春日の大明神翁の秋ひるがへす扇の手こそ面白や

記者 これ迄の内でこの面が一番面白いところと存じますか

武智 千歳が舞つてゐるところですが、古敷太夫だけが「笛の初音」を初音らしく爽かに届かせて發音してゐます。森 笛が、これについて出るところがよろしい。

武智 他の太夫が邪魔になつて仕方がありません。「打囃子」

の後の三味線の合の手の道八の演奏は如何にも「秘曲」らしくて名演奏で氣持がよろしい。

鴻池 囉子に「いづれも秘曲の打囃子」の條の節付の心が現

はれてゐません。お囉子連中に解つてゐません。唯間を合せてゐるだけで、殊に「打囃子」の鼓などはまるで監の底を叩くやうに聞えます。

太宰 三味線は最初から非常に冴えて、色んな意味の瑕をカバーしてゐますね。

第六回

（古親）昔にきて青丹よし奈良の都の（「ヲレ」）三笠山かけもあらたに慈悲萬行（古親）七五三の歩の大事十五の拍子とりどりに萬代の池の龜は甲に三曲を戴いたり

鴻池 「青にきて青丹よし奈良の都の」こゝへ來て初めて古親と道八とが、一つに融け合ひます。従つて古親の音遣ひの間と、道八の撥遣ひ、間のしめ方とが完璧で、太夫と三味線彈きとの位取りの典型的なもの、典型的なからみ合ひといふことが出来ます。

森 「青丹よし」と「奈良の都」とが、切れたやうな節付になつてゐますが、「青丹よし」が「奈良の都」の枕詞でありますから、續けるか、或は枕詞らしく聞かせて貰ひ度いと存じます。

鴻池 「慈悲萬行」は全部の太夫が捕つて言へた唯一の箇所で、こゝを探すのに苦心しましたよ。

武智 「歩の大事」は如何にも大事さうに語つてゐます。「十五の拍子」の次の「テン」を道八はお囉子の打切に今はさうといふことに氣をつかつて、かへつて結果として、お囉子の素讀藝にひきづられた結果となつてゐます。従つて珍らしく捲れてゐます。「戴いたり」は「萬代の池の龜の甲」といふ世に有り難いことのやうに語つてゐます。

鴻池 「戴いたり」の條は他の太夫がやると動物園あたりに

居る兎の背中に何か妙なものが戴つてあるといふ感じになつてゐます。それでは困ります。兎に角「戴いたり」の古鞆の語り方は表現の最骨頂であります。

(古鞆)瀧の水歷々と落ち夜の月あさやかにうかんだり渚の砂さくくとして且の日の色をらうず天下泰平國土安穏の今日の御祈禱なり

が巧みですね。
武智 「渚の砂さくく」といふところ本當に「さくく」たる感じがしてゐます。「天下泰平」の古鞆の演奏も如何にも泰平らしくてよろしい。これが翁の眼目ですから大切に語るべきです。「チン／＼／＼」とスネア「チン」をつゝこみ「チチテン」とのせて行くあたりは道八いつきいても至藝術です。

森 「安穏の云々」は謡ではなかつたやうに思はれます。又こゝに「御祈禱なり」とあつて更に、第九面に「御祈禱なり」とあるのは重複ですね。

第七面

鴻池 第六面から第七面へは巧く續いてゐます。

森 高い調子ですね。

武智 何本位ですか。

鴻池 二本位でせう。

森 隨分高いですね。

武智 景事はこういふ調子でないといけません。

鴻池 低くては音が遣へません。

森 幅のあるところで表現出来ないのでせうか。三味線の高い音を聞いてみると曲が軽いやうに感じますが……

鴻池 高くて高く感じないやう、低くて低く感じないやうに聞かかのが三味線の秘訣でせう。

武智 こゝは道八の御家藝です。

森 翁の位がよろしい。

武智 妾がよく出来てゐます。

太宰 「夜の月あさやか」にがよろしい。古鞆は叙景の表現

(古鞆)ありはらや芦原やなぢよ其翁共あれはなぢよの翁共そやいづくの翁とうくそよやな千秋萬歳悦びの舞成ば一舞まはふ萬ざい樂
鴻池 「御祈禱なり」までと「あり原や」以下の音遣ひがコロツとかはつてゐるのが、實に結構です。この條を語られた太夫は淨瑠璃史を通じて數人位のものではないでせうか。古鞆はその一人です。

武智 古鞆太夫が、こんなに樂んで語るといふことはめつたにないことと思ひます。翁といふ人がこうしたことを云つてゐる姿と、古鞆が音を面白く遣つてゐるところが一致してゐる點に、かうした藝が生れて來たのでせう。

森 堅いところにあるなごやかさが感じられ、義太夫節の面

白さはこゝにあると思ひました。

武智 「なぢよ」や「をやいづくの」の音遣ひは音遣ひの標

本でせう。神遊びといふのは全くこうした感じでせう。神

が人間といふものを通じての神である。さういふ感じです
太宰 神ばかりですと、人間と疎遠に感じられることがあり
ますが、こゝに感じられますことは神人和合といふことで
す。

武智 こゝを聞いて有難涙がこぼれました。古軀の高いニマ
ニテのあらはれです。

太宰 下俗のものは餘りに喜怒哀樂が多くあります
こうした観賞曲は外にはないでせう。

武智 道明寺はどうでせう。

鴻池 あれも大分事件が多いですね。

第九面

(ツレ)萬ざい樂(古軀 長久圓滿息才延命今日の御祈禱なり(縫)
おさへおさへおふ悦びありやく我此所よりも外へはやらじとぞ
思ふ

森 「萬ざい樂」が前につゞきません點が惜しい。能の方で

は三遍繰返し、三遍目を押へて沈めて行きます。

鴻池 まるでお経のやうに聞えます。三番叟の此の囃子は間

が早くなつてゐるだけで、息組は少しも變らないぢやあり

ませんか。それから「悦びありや」も下手ですね。一體三番叟は世界中の悦びを身に引受けてやる心でなければなりませんが、織太夫はせいぐ隣組の悦びしか表はせてゐません。

武智 いや吹込料が入る位のよろこびですよ。

太宰 菊五郎の三番叟は數十年を経て漸くこの悦びを表現出來るやうになりました。

鴻池 六代目のは橋がよりでキツとなるところの構へが強すぎましたが、最近はジツとしてゐるところになごやかな氣持が出て來ました。

武智 織太夫は悦びを表現しやうとしてゐますが、それだけでは内から湧き起る悦びは表はされません。技術的に云つて捲れてゐます。だから表現にならないのです。聴手にそれが受取れません。

鴻池 「三番叟」の曲と織太夫の腹とが遊離してゐるのです
武智 「我此所よりも外へはやらじとぞ思ふ」が一息に云へ
ることが大切なではないのです。

太宰 義太夫節としては技藝の上からは、翁より三番叟の方
が難しいのではないでせうか。従つて三番叟は翁と同等、
或は同等以上の藝術家を煩はさねばならないと思ひます。

(ツレ)物の音に連て立まふに忌衣千歳は近江なる白髪の御神なり

第十面

黒い尉は住吉の大神殿は浪のとふと打音は高天が原なれや岩戸に向ふ神かぐらほそろぐせりと吹笛もひいやひしきの音色迄春は假の立姿

鴻池（森氏へ）こゝでも「高天が、原」と切れてゐますね、お氣に召さぬでせう。

森 千歳が白髪の御神とあります、一説に八幡大神であるとあります。八幡である方が、千歳の颯爽たる風格にふさはしいやうに感じられます。

武智 「ひいやひしきの音色迄」で音を届かしてゐるのはやはり古靴だけです。大せい太夫をツレで吹込ませて結局聞えるのは古靴と相生だけです。古靴は音をとゞかしてゐる點で、相生は皆より一つづゝ遅れてゐるといふ點で……

太宰 だからアドの太夫と書いてある。（笑聲）

鴻池 こゝでは緩急があり、カハリがなければならないところですが、それが一向にありません。

第十一回

（継）あら芽出度やな物に心得たる後々の太夫殿にげんざう申そう（相生）てうど參つて候（継）誰がお立候ぞ（相生）年頃の傍

輩連友達御後の爲に龍立て候今日の三番叟猿樂きり／＼尋常に舞

ておりそへ色の黒い尉殿（継）此色の黒い尉が今日の御新舞を千秋萬歳所繁昌と舞納めふづる事は何より以つて安ふぞ先後の太夫殿は元の座敷へおも／＼と御直り候へ（相生）御

舞候へ（継）あらやうがましや（相生）さらば鉛を參らせふ（継）

森 こゝの三番叟の舞に太鼓が入るのは浮きすぎて嫌です。後の田植の舞のところはよろしいが……

武智 織と相生の三番叟の問答はまるでお葬式の挨拶をしてゐるやうですね。

森 二人が位をとりすぎてゐるからでせう。

太宰 位といふことが判つてゐない證據です。「色の黒い尉」がエロのグロと聞えます。

記者 そのまゝ太宰先生の御講義ですね。（笑聲）

武智 織太夫もこゝへ來ると完全に狂言の聲色にすぎません三番叟といふ住吉の神になつてゐません。三番叟の性格の表現から出ねばならないのに、織太夫自身の藝といふ低い藝から割出されますから、たゞの狂言の聲色になるのです昔この太夫がつばめ時代に「赤坂並木」の彌次郎兵衛で非常な評判をとつたことがあります。その後、織太夫を襲名してから同じ彌次郎兵衛を語つたことがありましたが、もう駄目でした。即ち彌次郎兵衛程度の情さへ語れなくなつたのです。その太夫の三番叟が單なる聲色になるのは當り前です。

第十二回

（相生）某が元の座敷へ直らふづる事は尉殿の舞よりもいと安ふぞう御舞なふては直り候まじ御舞候へ（継）御直り候へ（相生）御舞候へ（継）あらやうがましや（相生）さらば鉛を參らせふ（継）

そなたこそ（ツレ）初日は諸願満足圓滿二日の日は又二つ柱鉄女
の神子が一二三四五六七八九ノ十百千萬の舞の袖五月のさ女房が
笠の端を列ねて早苗おつ取上で諷ふた（古軒）千町（大隅）萬町

（ツレ）億萬町

森 かぶせるところが、巧く行つてゐないので、興味が薄い
と思ひます。

鴻池 たゞ妙な二つの聲が交はるぐ聞えるだけです。

武智 「千町」は古今の「千町」ですね。

鴻池 このレコード全體で、三番叟になつてゐるのは、この
「千町」だけでせう。

武智 「九ノ十」と間を盗んで云つて了つて更に間をおいて
「イイイ、、、、」の産み字を語つてゐます。それに他の

太夫は「コ、ノタリ——」と假名を拾つて云ふから揃はない
いのです。これがさきにも申しました揃はない一例で、義
太夫の詞のつめる云ひ方が判る人と判らぬ人とが一緒に語
つてゐるからです。「さ女房」第十三面の「火うち袋ぶ
らり」も同じことです。

第十三面

（ツレ）田をばぞんぶりぞ／＼ぞんぶりぞ御田を植るならば笠かふ
て着せふぞ笠かふてたるものならば猪も田を植うよ三日は福徳壽福
圓滿子の子實車座にならべたたつまつといまつつかいひつ
うち袋ぶりと付て ぞ是式三の にて三日是を舞とかや

武智 この三味線が、これ程まくれずによく揃つたのは、
文樂でも餘り聞いたことがありません。一枚目がよいから
でせう。

鴻池 この三味線の姿が判つてゐたら、織太夫や相生太夫は
嘘にもこんな三番叟は語れぬ筈です。

第十四面

（ツレ）三社の神の舞樂より國常闍もほがらかに人の面もしるぐ
と面白やの詞を始め今人の世の俳優に神といふ字のへんを取申樂
と申そぞ實恐れ有神遊び四海浪風納りて高砂の松の葉もちりやた
らりは眞言秘密狂言綺話の道直に三佛乘の因縁謂ワキ能しゆら事

（古軒）かつら事（ツレ）柳は綠り花は紅敷々や瀧の眞砂は盡る
共盡せぬ和歌ぞ敷島の神の教への國津民（古軒）治る（ツレ）御
代ぞめでたけれ

武智 この「三社の神」が語れてゐるのは古軒だけです。他
の太夫は邪魔にこそなれ、何の役にも立つてゐません、さ
うした太夫をツレに持つて來たことは如何に金儲けが大切
だとて、折角のレコードを臺なしにした點で、功罪相半ど
ころではありません。この企劃の最初に古軒は狂言は難し
いから自分が勉強して一人でやつて見ませうといつた意見
を用ひなかつた效は目前これを見よ、です。

森 「三佛乘の因縁ぞかし」といふのは謡曲「山姥」の中に
ある文句で、こゝに引用したのはよろしい、これは山姥の

中心思想を語つてゐるものであります。

記者 皆様、御苦勞様でした。これでレコード「三番叟」の合評を終ります。最後にこのレコードに添附された解説書について御意見はありませんか。

堀川 素人の爲めに何の用もなさないやうに思はれます。
太宰 啓蒙の書といふものは仲々難しいものです。總ての

賞の基礎になるものですから、最高の智識の所有者に書かせねばなりません。

武智 最初に挿入された舞臺寫眞は昭和十七年二月興行のもので、古今での最も悪い三番叟でした。どうかと思ひますほんとうに。

記者 ではこれでこの座談會を終ります。

表紙繪について

「差込人形」、「手妻人形」、「片手人形」に次いで今月は「碁盤人形」を用意してゐたが、解説を擔當される祐田善雄氏が御病氣の爲め、これを保留して、もう一度

「手妻人形」に就て珍らしい畫を選んで貰つた。

原畫は石田元季氏御祕藏の近松作「本朝三國志」繪巻より取つたものであるが、所收原本の終一頁は「本朝三

國志」とは關係のない別のものが紛込んで貼つてある。紛込んだ繪といふのは京都で上演したものであつて、風趣と示唆に富む圖柄の一部分を畫にしたのが表紙繪である。この繪と四百十一號（八月號）手妻人形の解説並に表紙繪を參照されたならば、手妻人形の輪廓が多少明白になるであらう。

猶一言附加へておくが、「本朝三國志」の三韓責に小人形を遣つてゐるのは現在のツメの人形が占めてゐる位に譬へられやうか。